

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp 名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

名張西・青峰高校 科学部獣害問題クラブ

訪問取材

名張西・青峰高校では、科学部という部活があります。その中で今、社会問題となっている獣害問題に取り組むグループがあり地域と連携しながら活躍されています。

成されています。尚、部員は獣害と直接関わりが少ない非農家の出であるということに深い感銘を受けました。

また、竹内先生は、サンショウウオの交雑についても造詣が深く、自然環境の中で起きている日本の在来種と外来種との交雑にまで視野を広げられ研究されています。

すでに和歌山県近辺ではニホンザルとタイワンザルの交雑種が見つかっています。対策が進められています。このまま、交雑が進めば、紀伊半島からニホンザルが消滅してしまうことにもなりかねません。

三重生物研究発表会で、名張西・青峰高校科学部の部員が「名張市の獣害問題に対して『自分たちにできること』と題した1年間の研究成果を発表しました。この発表により、三重県総合博物館長賞を受賞されています。



研究発表会風景



受賞式



取材風景

受賞おめでとう

平成29年2月11日
(土)三重県総合博物館(MiMu)において開催された第65回

三重生物研究発表会で、名張西・青峰高校科学部の部員が「名張市の獣害問題に対して『自分たちにできること』と題した1年間の研究成果を発表しました。この発表により、三重県総合博物館長賞を受賞されています。

イギリスから 猿対策を勉強に

文面をよく見るとHP猿新聞がきっかけのよう、追いつけ対策を勉強したいとのこと。猿新聞がイギリスで閲覧されていたとは驚きで、発信者にとってはうれしい限りです。

8月28日8時、ナイトさん桔梗が丘駅に到着。伊賀市阿波地区市民センターへ。阿波地区は、山端さんが農業研究所で活動されていた当時の本拠地です。

阿波地区自治協議会事務局長・東出直美氏が、今までの対策の経緯や現状を話されました。ジョンさんは追いつけは？追いつけは？など流暢な日本語で質疑応答があり、モンキーグッズの話に及ぶと非常に興味をそそられ、モンキーグッズでの追い払いには特に強い関心を寄せられていました。

勉強会終了後、出席者全員が会食し更に交

先日、突然外国からのメールを受信しました。発信者はイギリスのクイーンズ大学博士です。クイーンズ大学といえば、ビクトリア女王によって設立された由緒ある学校です。このような由緒ある大学の教授を、希望に添えるような案内ができるか非常に心配しましたが、三重県中央農業改良普及センターの佐藤恒亮氏のご協力で、兵庫県立大学の山端直人教授にお願いすることが決まり安心した次第です。山端さんは、昨年まで三重県農業研究所で獣害対策に携わってこられた方で、サル対策では著名な方です。山端さんの尽力で8月28日10時から伊賀市阿波地区市民センターで勉強会を開催する運びとなりました。伊賀市阿波地区は獣害対策においては非常に先進的な地域。ナイトさんは社会人類学を専攻。近年の研究テーマは人間と動物の関係で、今回のサル対策の勉強会もその一環だと思われます。イギリスではサルはいないそうです。

山村準様、こちらは数年間 “さる新聞” を読ませていただいて勉強してきたジョン・ナイトです。私はイギリスのクイーンズ大学ベルファストのものです。私は日本における猿害の問題を研究しております。来月日本に行く予定で様々な猿害対策を調べるために数か所を訪ねたいと思います。

今回私の目的の一つはいわゆる “追い上げ” の対策を勉強したいと思います。できたら私は実際に追い上げの対策をやっているところに自分で行って追い上げのやり方、あるいは頂点や弱点を理解したいとおもいます。そうするとまず適当な場所を見つけないければなりません。恐れ入りますが山村さんは私を紀伊半島の追い上げのやっている地域は教えてくれませんか。

突然の頼み事はすみませんでした。

敬具
ジョン・ナイト 博士
クイーンズ大学ベルファスト
社会人類学

(原文のまま)



説明を聞くジョンさん
右から3人目



流を深めました。午後、多目的防護柵「おじる用心棒」の現地説明会を最後に勉強会を終了しています。因みに、クイーンズ大学は、北アイルランドの首府ベルファストの南方にその学舎はあり、かの有名な豪華客船、タイタニック号はこの地で造られたと聞きます。

シカも生態系の一員 捕獲は慎重に

近年、シカの増加はとどまることを知らず、この20年間で約9倍に増えているとされ、被害もそれにつれ増加し深刻化しています。

シカの被害は農作物や森林への食害のみに留まらず、道路に飛び出し、自動車の事故や線路侵入による鉄道事故が多発して、社会問題となっています。被害を減らすためには、その原因を理解することが重要です。

なった状況では、いったん増え始めたシカの数を抑制するのは容易ではありません。シカの繁殖力は旺盛で年々捕獲数に輪をかけて増え続け深刻化に歯止めがかからないというのが現状です。

シカに限らず野生動物が山から里に下りてくるのは、生息密度過多が原因で、生息域と個体数のバランスが崩れたことが原因であると思います。

シカとの戦いは難しく長いスパンで考えなければなりません。対策の中心は、「防ぐ」と狩猟により「減らす」ことに分けられます。

「防ぐ」では、年々新しいシカ被害防止グッズも発表されています。そういった商品の情報を常に確認し、少しでも有効な策を考えることが重要です。

ま引き抜こうとするのだが、きつくて抜けない。手をゆるめればいいのに、そこまで知恵が回らないのだ。夜が明けると農民に生け捕りにされるわけだが、その時のサルは、米粒をしっかりと握りしめたまま実に間の抜けた顔をしているという。



チャット一服

『ひょうたんザル』

アルジェリアのカビール地方の農民は、ひょうたんを木にしっかりとくくりつけ、中に米粒を入れておく。ひょうたんには、サルの手がちょうど入るくらいの穴が開いている。夜になると、サルは木のところにきてひょうたんの穴に手を突っ込み、米粒をわしづかみにする。そして握った手をそのま

これは、まさしく人間の姿にほかならない。この話の持つ教訓は、われわれの生活にも広く当てはめて考えることができるだろう。

サミュエル・スマイルズ、三笠書房より抜粋

現在では最も効果的な柵だと思えます。「減らす」は、行政任せですが、行政だって担当者は数年おきに部署替えがつづくし、ハント不足の現状では今後の大きな課題となっています。シカの頭数を抑えるために、ジビエを振興し、狩猟を盛んにするなどいわれて

逆効果になることがありまます。今「オオカミがおつたらな」とよく耳にします。野生動物が急増したのもオオカミの絶滅が大きく影響しています。オオカミの絶滅から100年。あちこちの森林がゆっくりと限界を迎え始めています。オオカミの存在理由は、いわば森の調整そのものでもあったのです。一時的な狂犬病の流行により、家畜や人を害する動物と厄介視され絶滅に追い込まれました。人間の愚かさか招いた悲劇で、今、自然界に弊害をもたらす大きな要因となっています。シカも生態系の一員捕獲は慎重に。

名張B群移動状況

平成29年8月24日～8月21日

指導員報告

B群は、8月下旬には安部田、坂之下集落と深野集落の山中を移動していましたが、9月初旬は国道165号線横断して赤目町長坂と一ノ井方面に移動しています。

9月中旬からは宇陀市西谷蕨集落付近で活動しています。

熟した柿の採食や、2～3頭での木ゆすりを目視しています。

☆編集局

最近、A・B群とも着信がなく行方がわからないという情報が多いが、何が原因でしょうか？



名張A群移動状況

平成29年8月24日～9月21日

指導員報告

A群は、8月下旬からは、上比奈知、中知山集落と青蓮寺ダム湖弁天橋周辺で活動。

9月初旬は上比奈知から下比奈知、中知山集落、青蓮寺ダム湖弁天橋に移動。

A群は、いつも通りの遊動パターンで遊動しています。

☆編集局

秋は山の餌の豊富な季節。ミズナラ・ブナなどのドングリ類は、定期的に豊作と凶作を繰り返していますが、近頃では豊凶に関係なく被害が発生しています。

田畑を安全・簡単・大量に得られる餌場と学習してしまっています。農業廃棄物も餌になるということ忘れないで下さい。

